

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	『ギリシア語魔術パピルス』にみる魔術師たちの自画像
Author(s)	前野, 弘志
Citation	史学研究 , 305 : 22 - 50
Issue Date	2020-03-31
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00055683
Right	
Relation	



『ギリシア語魔術パピルス』にみる 魔術師たちの自画像

前野 弘志

はじめに

『ギリシア語魔術パピルス』（主に2世紀から5世紀のエジプトにおいてギリシア語で書かれた魔術のマニュアル本の総称）を書いたのは誰か。この問いに対する答えは、三つのレベルに分けて考える必要があるだろう。レベル1：ある種の魔術を開発し、その方法を書き残したとされる人物は誰かを探ること、レベル2：現存する最後に書かれた文書に至るまでに、同様の文書群を何世紀、あるいは何十世紀にもわたって書き継いだ無数の書記たちとは、どのような人物たちだったのかを探ること、レベル3：現存する文書を最後に書き残した人物は、どのような人物だったのかを探ること、である。

また『ギリシア語魔術パピルス』を書き残すべく書き継いだ人々、つまりマニュアル本の「生産者」をプロフェッショナルという意味で「魔術師」と呼ぶこととしよう。並んで、それらのマニュアル本に従って自ら魔術行為を試みた人々、つまりマニュアル本の「消費者」をアマチュアという意味で「魔術者」と呼ぶこととしよう。

小論の目的は『ギリシア語魔術パピルス』の書き手たちが、どのような人物であったのかを『ギリシア語魔術パピルス』の記述の中から読み取ろうとする試みである。彼らは自らの名前を記さなかった。しかし、ある魔術の開発を誰に仮託したのか、ある魔術文書の内容の傾向や配列、魔術の表題や解説文、宣伝文句、ページ割り、イラストの有無、文書としての完成度など、文書の内容と体裁から、おぼろげながらも彼らの自画像が浮かび上がってくるだろう。そしてその自画像の向こう側に『ギリシア語魔術パピルス』の消費者たちの姿も透けて見えてくるだろう。

第1章 研究史

19世紀のエジプトでギリシア語の魔術文書が大量に発見され、ヨーロッパに持ち込まれて以来、個々の文書が個別に出版されていたが、それらを最初に集成したのが K. Preisendanz, (Hrg.), *Papyri Graecae Magicae, Die griechischen Zauberpapyri*, Teubner, Leipzig, Stuttgart, Bd.I [1928, ²1973], Bd.II [1931, ²1974] (=PGM) である。こ

『ギリシア語魔術パピルス』にみる魔術師たちの自画像（前野）

れは『ギリシア語魔術パピルス』のバイブルともいえる書物で、文書情報、ギリシア語の翻刻と異読、およびドイツ語訳が掲載されている。しかし語句の註釈などはないので、完全に専門家向けの史料集である。その後、この集成に基づいて、膨大な数の研究書および論文が出版され、この研究分野に分け入ろうとする者を圧倒して止まない。ここでは、魔術研究の画期となった1990年代以降に限定して、小論のテーマに即した研究の極々一部を取り上げ、研究史の流れを大づかみに紹介する。

まず、H. D. Betz (ed.), *The Greek Magical Papyri in Translation; Including the Demotic Spells*, Chicago, [1986, ²1992](= *GMP*)は、新しい集成であり *PGM* を補うものである。というのも *PGM* 出版以後に発見された新史料を加え、本来『ギリシア語魔術パピルス』と並んで書かれていたにもかかわらず *PGM* では除外された『デーモティック魔術パピルス』を含めたからである。またギリシア語やデーモティックなどの原文はないが、英語訳と語句の詳細な註釈および解説が施されているため、研究者や学生にとってのみならず、古代の魔術に関心を持つ一般読者にとっても、魔術文書へのアクセスを容易にした。導入部において、研究の現状と今後の課題が列挙されている。時代的には『デーモティック魔術パピルス』が『ギリシア語魔術パピルス』に先行した (p.xlv)。エジプト宗教はギリシア宗教の影響を受けて変容し、そこにギリシア宗教のフォークロア的な要素が保たれた (p.xlv)。エジプト宗教はユダヤ教の影響も強く受けた (p.xlv)。『ギリシア語魔術パピルス』を書いて使用した魔術師はエジプト人ではあっても、ものの考え方においてギリシア化していた (p.xlvi)。彼らは伝統的に魔術を行なった神殿付きの神官とは異なる遍歴する魔術師であり、各地で仕入れた宗教的諸要素を浅薄に取り入れた結果、シンクレティズムを生み出した (p.xlvi)。また『ギリシア語魔術パピルス』は『デーモティック魔術パピルス』を含む、より大きな集成の一部であり、両者は不可分のものである (p.lv)。『デーモティック魔術パピルス』(*PDM* xiv / *PGM* XIV, *PDM* xii / *PGM* XII, *PDM* lxi / *PGM* LXI, *PDM* Supplement) は、いずれもテーベで収集された「アナスタシ・コレクション」に由来し、3世紀にエジプト語とギリシア語に精通した一人の書記によって筆写・使用された (p.lv-lvii)。エジプト語文書はギリシア語文書からの翻訳であるらしいが、その原典はエジプト語文書である (p.lvii)。そして、これらバイリンガル文書の関係性を明らかにすることは、これらの文書が作成・筆写された文化的環境を理解するのに役立つだろう (p.lvii)。

次に、W. M. Brashear, *The Greek Magical Papyri: An Introduction and Survey; Annotated Bibliography* (1928-1994), *ANRW* II. 18. 5: p.3380-3684, Berlin, [1995] は、1928年から1994年までの関連文献を網羅したものであり、その時までの研究成果の総決算といえる。議論の重心は、魔術文書の歴史と年代、讃歌、呪文、記号など魔術文書の諸要素の解説、および各種のカタログ作成に置かれ、中でも呪文リストは圧巻である。魔術師を扱った項目はないが、伝統的なエジプトの魔術と『デーモティック魔術パピルス』か

ら説き起こし、ギリシア人、ローマ人、ユダヤ人にとって、エジプトは神秘と魔術の国であり (p.3390)、伝統的なエジプトの魔術は、後の『ギリシア語魔術パピルス』と類似点が多く (p.3391)、『ギリシア語魔術パピルス』のプロトタイプは『デーモティック魔術パピルス』であるが、おそらく PDM xii は PGM XII からの翻訳であること (p.3397) を指摘する。また魔術文書が大量生産された証拠に言及し、例えば、テーベの文書館では錬金術の文書と PGM XIII は全て一人の手で書かれたこと、ギリシア語、コプト語、アラム語の3言語で書かれた文書は、多様な顧客を念頭において作られたものであり、忙しく働く魔術師たちの工房の存在を推測する (p.3418-3419, p.3405, n.84)。

さらに、D. Frankfurter, *Religion in Roman Egypt: Assimilation and Resistance*, Princeton, [1998] の第5章 Priest to Magician: Evolving Modes of Religious Authority は、魔術文書の書き手の起源を掘り下げた研究である。それによると、エジプトの王権は元来、王の権威に対して絶大な権力を振るう神官団によって運命を握られており (p.198)、プトレマイオス朝が終焉しても、エジプト神官団の権力はなお強く (p.198)、2世紀末まで栄華を誇っていたが (p.199)、3世紀になって神殿を地方行政に依存させる政策がとられると、当時急速に経済的に衰退しつつあった地方行政とともに、多くの神殿も衰退、荒廃し、放棄されていった (p.199-200)。そうして神殿を出た神官たちは、自分たちの権威と食い扶持を維持するために、否応なく新しい生きる道を模索して、ある者は町や村で挙行される宗教儀式的指導者になり、ある者は町や村や地方の防衛や反乱の扇動者になり、ある者は人々の日常生活の心配事 (祝福・呪い・出産・避妊・恋愛・癒しなどに効く呪文、護符、家の祭壇の作り方) などに関するアドバイザーとなった (p.203)。元来、神殿において公的に癒し・呪い・安全の呪文を唱えていたのは「朗唱神官」と呼ばれる高位の神官で、彼らは神殿に保管された聖なる書物を扱うプロであったが (p.211)、彼らが神殿を出て、神殿魔術と民間の仲介者となった (p.212)。また彼らの中には、自らを古代地中海世界の魔術師のイメージと同化させ (p.225)、自分の権威をエジプトの外に売り込む者も現れるようになり (p.226)、フリーランスの、遍歴する、個人的な儀式的コンサルタントとなった (p.232)。

一方、Matthew W. Dickie, *Magic and Magicians in the Greco-Roman World*, Routledge, [2001] は、従来の魔術研究が魔術のテクニクについて多くを論じてきた一方、魔術の専門家である魔術師については等閑視してきたこと、また魔術の知恵を収集した教養人に関する包括的な研究はまだないことを指摘した上で (p.1)、扱う時代を魔術が誕生した前5世紀初頭からアラブによる征服の650年までに設定し (p.5)、様々なタイプの魔術師を幅広く叙述した。その中で、前期帝政のギリシア・ローマの魔術師を、教養のある魔術師、有力者のお抱え魔術師、遍歴魔術師に分け、エジプトで魔術を研究した教養のある魔術師の例は、文学的な虚構の中にしか確認されないが (p.203)、エジプトの魔術文書に親しんだ人々は、エジプト社会における文学的エリート、すなわちエジプト人の神官であり、エジプトの影響を示す魔術文書の一

『ギリシア語魔術パピルス』にみる魔術師たちの自画像（前野）

群が『ギリシア語魔術パピルス』であり、その大部分はテーベに住んだ一人の人物の所有物で、同じ手によって書き写されたことに言及する (p.203)。一方、庶民のニーズに応えたのは遍歴する魔術師で (p.224)、彼らは大道芸人的な性格を持った人々であった (p.225)。具体的なイメージとしては、剣呑み、蛇使い (p.226)、ジャグラー、アクロバット、熱弁者、詩の朗読者などで (p.227)、そうやって客を集めた後、水をザルで運んだり、あごヒゲを手で触れて赤くしたり、死者の霊を呼び出したり、人に夢を送ったり、少年を依代として水の入った鉢や鏡やランプを見つめさせ、その中に神霊を見させて預言を語らせるなど、不思議な見世物をして代金をとった (p.227)。またギリシアには、髪を剃ってエジプト風の衣装を着たエジプト人神官と称する魔術師が死体に語らせ (p.229)、旅するユダヤ人エクソシストもいた (p.231)。フェニキアやパレスチナには、自分が神であるとか神の子であるとか聖霊であるとか公言する者はたくさんおり、イエスはその一人に過ぎなかった (p.233, p.234)。これら遍歴する魔術師の出没する主な場所は、神殿の境内、都市の広場、町の辻々であった (p.233)。

また、Jacco Dieleman, *Priests, Tongues, and Rites: The London-Leiden Magical Manuscripts and Translation in Egyptian Rituals (100-300 CE)*, Brill, Leiden / Boston [2005] は、エジプト語とギリシア語で書かれた二つのバイリンガル魔術文書 (PGM XII / PDM xii と PDM xiv / PGM XIV) の作成者・使用者の文化的アイデンティティに光を当てたものである (p.IX)。両者は本来一つの文書であったようだ (p.21)。考古学的文脈は不明であるが (p.IX)、ある農民が1828年以前にテーベの一つの墓か一つの神殿か一つの個人の家で発見したらしい (p.IX)。年代は古文書学的根拠から2世紀か3世紀と考えられる (p.IX)。この文書の作成者に関する研究がこれまでなされなかった理由は、研究者の語学的訓練の制約とこれらの文書が分散して保管されていたことにある (p.11)。この文書の作成者は、高度なスキルを持った文献学者であり、エジプト語とギリシア語に精通した人物である (p.11)。ヒエラティック、デーモティック、古いコプト語、ギリシア語が使われており、前二者は、ローマ時代にはおいては、エジプトの神官しか使っていなかったため、その著者・編者・読者は、神殿学校で書記の訓練を受けたエジプト人神官であり、文書は神殿の書写室に由来すると考えられる (p.286)。内容・形式・素材は似ているのに、異なる言語が併用された理由は、必ずしも民族的文化的背景によるものではなく、むしろ言語的戦略に由来するものと考えられる (p.288)。つまり、ギリシア語文書はギリシア人の顧客のために書かれたもので、それに添えられたデーモティック文書は自分たち神官の仲間内で使用するために書かれたのである (p.294)。おそらく帝政初期のある時、テーベのエジプト人神官たちがアレクサンドリアかナイル渓谷のギリシア化した都市に仕事で赴いて、ギリシア語で書かれた新しいタイプの魔術文書と出会い、それをテーベに持ち帰って研究し、神官のサークル内で使用するためにデーモティックに翻訳したが、直翻ではなく、ヒエラティックやデーモティッ

クで書かれた古い文書を参考にして、彼らの気の向くまま、ギリシア語文書と似てはいるが同じではない、新しいデーモティック文書を創り出したのだろう (p.294)。このようなバイリンガル文書は、単にヘレニズム世界やグレコ・ローマン期エジプトといった多文化社会の産物であるのみならず、伝統的な社会構造や宗教的見方が重要な変容を経験している時代にあつて、それに適した意味のある新しいアイデンティティを構築するために、様々な文化的・宗教的な伝統を組み入れて操作しようとした、エジプト人神官たちの側の創造的な試みの証と見るべきである (p.294)。

最後に、D. Frankfurter (ed.), *Guide to the Study of Ancient Magic*, Brill, Leiden / Boston, [2019] は、emic (その土地に固有の、内部の人間の) 叙述と etic (二級の、外部の人間の) 叙述の原則にこれまで以上に固執し (p.22)、各章の筆者に対して、その土地に固有の用語の使用に固執するよう要請すると同時に、外部からの翻訳語であり、固有の現象を一般化してしまい、また誤解を招く近代的な概念である magic という語の使用をできる限り慎むよう要請するが、その目的は、非合理で曖昧な儀式行為を指すその土地に固有の用語と言説、そしてその用語を組織するさまざまな恐怖を、読者にできる限りさらけだすためである (p.23)。同書の第13章、Jacco Dieleman, *The Greco-Egyptian Magical Papyri*, p.283-321は、上記の原則に従って magic という語の代わりに Greco-Egyptian private ritual という語を使う (p.284)。この「グレコ・エジプト式の個人的儀式」は、ローマ期においてギリシア化された諸都市や村々で流行り始め、成熟するとエジプトの田舎に広がり、さらにはエジプトから出てローマの諸属州へと拡散していった (p.285)。「グレコ・エジプト式の個人的儀式」は明らかに書記階級の産物である (p.286)。これらの文書は、考古学的文脈は不明であるが、発見場所に従って、「テーベ魔術文書 (3-4 世紀)」(*PGM XII / PDM xii, PGM XIV / PDM xiv, PDM Suppl, PGM I, PGM VI + II, PGM IV, PGM V, PGM XIII, PGM Va*)、「ファイユーム魔術文書 (4 世紀)」(*PGM XXXVI, PGM XXXVIII*)、「ヘルモンティス魔術文書 (4 世紀)」(*PGM VII, PGM VIII, PGM XIa*)、「ケリス魔術文書 (4 世紀末)」、「多言語魔術文書 (5-6 世紀)」の五つに分けられる (p.292-295)。また魔術文書にはしばしば、魔術を権威づけるための伝承が付随し、これらは歴史的な現実に基づかないが (p.312)、そこには文書の作成者・使用者のグループアイデンティティや自己定義が垣間見られ、ギリシア語版はデーモティック版とは異なる自己定義をはっきりと表明している (p.313)。すなわちギリシア語版には、魔術の起源としてもっばらエジプトの神々が挙げられ (p.313)、開発者としてエジプトの神官、ユダヤの文化的ヒーロー、ペルシアのマゴイ、ギリシアの哲学者や聖人が挙げられる (p.313)。一方、デーモティック版には、このようなインターナショナルな開発者の言及はなく、エジプト神官にも言及がないことは、ギリシア語版とは異なる使用者のグループを念頭に置いて作成されたことを示唆する (p.315-316)。

以上、これまでの研究成果をまとめると、次のようになるだろう。まず魔術の源

『ギリシア語魔術パピルス』にみる魔術師たちの自画像（前野）

はファラオ時代の神殿に発し、帝政初期にギリシア人の魔術文書がエジプトに流入した時、それをエジプト人神官たちが神殿の書写室でデーモティックに翻訳し、それとエジプトの伝統的な魔術とを融合させて新しい魔術文書を作成し、ギリシア人の顧客をターゲットとしてギリシア語で魔術本を書いた一方、3世紀になってエジプト神殿が衰退すると、神殿を出た神官たちの中には、ギリシア・ローマ世界を遍歴するフリーランスの魔術師になる者もいて、彼らが各地を経めぐり、さまざまな要素を浅薄に加えた結果、シンクレティズムが生み出された。このように、魔術本の「生産者」の社会的地位や文化的環境、魔術文書の伝播の双方向性、シンクレティズムの生成原理、そして魔術本の「消費者」については、一定の知見が得られている。

しかし、一つ疑問が残る。Dieleman が言うように『ギリシア語魔術パピルス』に記された魔術が「グレコ・エジプト式の個人的儀式」であるならば、専門家に依頼して魔術を行ってもらうのではなく、素人がマニュアルを見ながら自分で魔術を行うところに、その最大の特徴があったことになる。そうだとすれば、庶民は一体、どこで誰から魔術のマニュアル本を買ったのだろうか。神殿を出た遍歴するエジプト人神官からか、遍歴する大道芸人のような魔術師からか、それとも本屋からか、あるいは別のルートからか。すなわち、魔術本の「生産者」と「消費者」の間にはたはずの「販売者」と「販売経路」については、まだ議論の余地があるように思われる。この問題に小論が真っ向から取り組むことはできないが、なんらかのヒントを得ることは出来るかもしれない。

第2章 魔術を開発したとされる人物たち（レベル1）

まず『ギリシア語魔術パピルス』から名前の分かる魔術師41人を検出した。この中には明らかな神は含まないが、半ば神のような人物は含めた。地域別に分けると、エジプト12人、ギリシア15人、ユダヤ6人、シリア1人、ペルシア4人、ローマ3人である。以下、地域別に個々の魔術師について検討していく。なお文書を同定するために付されたno.は、前野 [2015]⁽¹⁾ のリストにある文書番号を指している。

1) エジプト

(1) ネフォテス

no.31は鉢占いの方法を記した書簡形式の文書である。挨拶文「ネフォテスからプサムメティコス、不死なるエジプト王へ、ご挨拶申し上げます。あなたを偉大なる神が不死なる王に任命し、自然が最高の賢者に任命したので、私もあなたに私の研究成果を披露したく思い、あなたに次の儀式（の仕方）を書き送りました。（そ

れは) 全く簡単に、聖なる作用を実現します。それをあなたも試すと、その方法の不思議に驚くことでしょう。」 Νεφώτης Ψαμμητίχῳ, βασιλεῖ Αἰγύπτου αἰωνοβίῳ, χαίρειν· ἐπεὶ σε ὁ μέγας θεὸς ἀπεκατέστησεν βασιλέα αἰωνόβιον, ἡ δὲ φύσις κατέστησεν ἄριστον σοφιστήν, καὶ ἐγὼ σοι βουλόμενος ἐπιδειξασθαι τὴν ἐν ἐμοὶ φιλοπονίαν ἀπέστειλά σοι τήνδε τὴν πρᾶξιν ἐν πάσῃ εὐκοπίᾳ ἱερὰν ἐπιτελουμένην ἐνέργειαν, ἦν καὶ <σύ> δοκιμάσας θαυμάσεις τὸ παράδοξον τῆς οἰκονομίας ταύτης· (IV.154-162)、本文中で王に「(あなたも) きっとご存知のはずです、最も偉大なる王にして魔術師たちの先導者よ、」 οὐκ ἄγνοεῖς δέ, βασιλεῦ μέγιστε καὶ μάγων καθ<γε>μῶν, (IV.243) と呼びかけ、後で「同研究成果は、偉大なる王よ、あなただけに留めて下さい、あなたによって守られ、誰にも教えないで下さい。」 αὕτη ἡ πραγματεία, βασιλεῦ μέγιστε, εἰς σὲ μόνον χωρησάτω, φυλασσομένη ἀπὸ σου ἀμετάδοτος. (IV.254-256) と秘匿を請う。ネフォテスはおそらくエジプト人の神官で、「ネフォテス」という名前は、エジプト名「ネフェル・ホテプ」 Nfr-ḥtp がギリシア語風に発音されたもので、元々はエジプトの神の名であったが、誰のことを指しているのか不明である (GMP, p.337)⁽²⁾。「プサムメティコス」は、エジプト人の名前 Psmtk のギリシア語化したもので (GMP, p.338)⁽³⁾、第26王朝 (サイス朝) の実在したエジプト王であり、初代王1世 (在位:前664-610年)、三代王2世 (在位:前595-589年)、六代王3世 (在位:前526-525年) の三人がいるが⁽⁴⁾、誰を指しているのか分からない。ネフォテスは魔術師で、実験を重ねて魔術の方法を編み出したと自ら語り、プサムメティコス王も魔術師のリーダーと呼んでいるので、これは魔術師どうしの文通である。しかし二人ともエジプト人なので、本来はエジプト語で書かれていなければならないので、これはそのギリシア語訳ということなのだろう。

(2) プサムメティコス →(1)を参照

(3) ピテュス

no.58も書簡形式の文書である。挨拶文「ピテュスの連行(魔術)。オスタネス王へ、ピテュスのご挨拶申し上げます。(王は) 私に事あるごとにドクロ伺いについて手紙を書かれるので、愛するに値するような、またあなたを満足させることの出来る以下の魔術の方法を、あなたにお送りすることが必要であると思いました。そして今からあなたにその方法をご指南いたしましょう、」 Πίτυος ἀγωγή. Βασιλεῖ Ὀστάνη Πίτυος χαίρειν. ἐπειδὴ μοι παρ' ἕκαστα γράφειν περὶ τῆς τῶν σκύφων ἀνακρίσεως, ἀναγκαῖον ἠγησάμην σοι ἐπισιλεῖλαι τήνδε τὴν οἰκονομίαν ὡς οὖσαν ἀξιέραστον καὶ δυναμένην σοι ὑπεραρέσκειν. καὶ σοι ὑποτάξω ἀπεντεῦθεν τὴν οἰκονομίαν, (IV.2006-2012)。これも王と魔術師の文通である。ピテュスの名前は、no.57の表題「あらゆるドクロを用いたピテュス王の連行(魔術)。」 Ἀγωγή Πίτυος βασιλέως ἐπὶ παντός

『ギリシア語魔術パピルス』にみる魔術師たちの自画像（前野）

σκύφου. (IV.1928-1929)、no.60の表題「テッサリア人ピテュスの死体伺い。」
Πίτυος Θεσσαλαοῦ ἀνάκρισις σκήνους. (IV.2140-2141) にも見られる。ピテュスは、
イアムブリコス『エジプトの秘儀について』(8.5、10.7)に言及されたエジプト人
の神官・預言者ピテュスのことで、ゾシモス『オメガの文字について』のピトス、
プリニウス『博物誌』(28.82)に言及されたデウラキウムのピトゥスとも同一人物
である(*GMP*, p.338)⁽⁵⁾。彼の名前は Pa-t3 で「その国(エジプト)に属する者」を
意味し、「テッサリア人」というのは後世の捏造であろう⁽⁶⁾。実在したオスタネス
はペルシア人のマゴスで、クセルクセス1世紀(在位:前486-465年)⁽⁷⁾の宮廷に
おける神学者であり⁽⁸⁾、王とともにギリシアに遠征し、アブデラ人の哲学者デモク
リトスに教授したとも、ギリシアに魔術を伝えたとと言われており(プリニウス『博
物誌』30.8)、後世、多くの書簡が彼の名前で伝来した(*GMP*, p.337)⁽⁹⁾。

(4) ピベキス

no.72の表題「ピベキスの悪霊に取り憑かれた人々のための(呪文)実証済み。」
Πρὸς δαιμονιαζομένους Πιβήχεως δόκιμον. (IV.3007)、末尾に「この呪文はヘブライ
語であり、そして清浄な男たちによって守られている。」ὁ γὰρ λόγος ἐστὶν Ἑβραϊκός
καὶ φυλασσόμενος παρὰ καθαροῖς ἀνδράσιν. (IV.3084-3086)。ピベキスはエジプトの
伝説的な魔術師で、彼の名前の意味は P3-bik「ハヤブサ」ある(*GMP*, p.96, n.386)⁽¹⁰⁾。
彼はまた錬金術師であり、ペルシアのマゴスであるオスタネスと親交があった⁽¹¹⁾。

(5) アポロベクス →(4)を参照

no.184の「アガトクレスの夢を送る(魔術)」の末尾に、「その名はこれ。これを
アポロベクスも使った。」τὸ ὄνομα τοῦτο. τούτῳ καὶ Ἀπολλώβηξ ἐχράτο. (XII.120-121)。
アポロベクスは、アプレイウス『弁明』(90)に出る有名な魔術師であり、プリニ
ウス『博物誌』(30.9)は、彼をデモクリトスの先駆者とし、デモクリトスがアポ
ロベクスの本をコピーしたといい、またアポロベクスは、ホルスのあだ名でもある
(*GMP*, p.157, n.35)⁽¹²⁾。もしこの名前がエジプト名 hr-bik「ハヤブサ・ホロス」のギ
リシア語訳だとすれば、ピベキス「サヤブサ」と同じかも知れない、というのもア
ポロ Apollo はホロスと同一視されたからである⁽¹³⁾。

(6) ヒエログリフ書記トゥフェス

no.217の呪文のバリエーションの一つとして、「ヒエログリフ書記トゥフェスに
よってオコス王に対して呼びかけられた聖なる名にあるように。」ὡς δ' ἐν τῇ πρὸς
᾿Ωχον βασιλέα προσφωνούμενον ἅγιον ὄνομα ὑπὸ Θφῆ ἱερογραμματέως. (XIII.957-
959)。オコスは、アルタクセルクセス3世(治世:前358-338年)のことであるが、
トゥフェスについては、何も知られていないので、おそらくこの会話も虚構である

う (GMP, p.193, n.132)。

(7) ヒエログリフ書記プヌーティス

no.2も書簡形式の文書である。表題と挨拶文「プヌーティス、ヒエログリフ書記の使い魔（を獲得する魔術）。プヌーティオスがケーリュクス、神を畏れる者に、ご挨拶申し上げます。（私は）知っている者として、次の使い魔（を獲得する方法）をあなたに指示しました、次の儀式の執り行いに失敗しないためにです。無数の書物の中に（書かれて）我々に残された全ての論文を取り除き、全てのうちの一つを（欠損）」[Πνού]θεως ιερογραμματέως πάρεδρος. . . Πνούθιος Κήρυκι σε[βα]ζομένω τῶν θεὸν χαίρειν. εἰδώς προσέταξά σοι [τό]νδε [τὸν πάρεδρον] πρὸς τὸ μὴ διαπίπτειν ἐπιτελ[οῦν]τα [τῆ]νδε [τὴν πρᾶξ]ιν. παρελόμενος τὰ πάντα καταλει[πόμενα ἡμῖν ἐν] βίβλοις μυρίαῖς συντάγματα, [ἔ]ν πάν[των]. . . . (I.42-47)、続いて「さて、（あなたが）十分に学び知るように、（私は）次の論文を送りました。なぜならばプヌーティスの呪文は、男神たちや全ての女神たちを説得する力を持っているからです。では今からあなたに、使い魔の獲得について書き記しましょう。」[νῦ]ν δὲ ἀπέπεμψα τήνδε τὴν βίβλον, ἵν' ἐκμάθῃς. [ἔχει γὰρ δύμαν]ιν Πνούθεως λόγος πείθειν θεοῦς καὶ πάσας τὰ[ς θεάς. συγγράψω] δέ σοι ἐντεῦθεν περὶ τῆς παρέδρου λήψεως. (I.51-54)、最後に「さて以上のことは、誰にも教えないで下さい、あなたの血の繋がった息子だけを除いては、我々から語られた作用を求めた時に。永遠に幸福に。」ταῦτα οὖν μηδενὶ παραδίδου, εἰ μὴ μόνω [σο]υ ἰσχνῶ υἱῶ σου ἀξιοῦντι τὰ [παρ'] ἡμῶν ῥηθέντα ἐνεργ[ή]-ματα. διευτύχει. (I.192-194)。プヌーティスはエジプト人神官である⁽¹⁴⁾。ここで「血の繋がった息子」と訳した原文は ἰσχνῶ υἱῶ であるが、ἰσχνῶ は他には確認されない単語で、エジプト語あるいは他のセム系言語の「あなた自身の腰（生殖器）の息子」という熟語から影響を受け、ギリシア語の ἴσχιον「腰」を当てて作られた表現のようである (GMP, p.8, n.37)。ということは、この手紙の原本は、エジプト語で書かれていたと考えられる。「プヌーティス」とも「プヌーティオス」ともあるが、両者は同一人物を指すと考えられる (GMP, p.4, n.12)。これはエジプト人の名前で「神の彼」He of God を意味する (GMP, p.338)⁽¹⁵⁾。一方「ケーリュクス」はギリシア語で、普通名詞としては「伝令」を意味するが、実在したか架空の神官あるいは神聖な地位を指すのかもしれない (GMP, p.4, n.13)。もしかしたら、エレウシスの一つの神官家ケーリュケスと関係があるのかも知れないが⁽¹⁶⁾、エジプト語の翻訳かも知れない⁽¹⁷⁾。

(8) ヒエログリフ書記ユ

no.81の表題「彼の書簡に（書かれた）ヒエログリフ書記ユのステーレー。」Στήλη τοῦ ἱεῦ τοῦ ζωγράφου εἰς τὴν ἐπιστολήν. (V.96-97)。ζωγράφος は通常「画家」と

『ギリシア語魔術パピルス』にみる魔術師たちの自画像（前野）

訳されるが、この場合は「ヒエログリフ書記」と訳すべきとの考えがある（*GMP*, p.103, n.11）。一方 Dieleman は、文字通り「画家」と訳すべきであり、おそらくミイラのマスクあるいは肖像画の画家を指し、エジプト人神官であると考え（¹⁸）。「ユ」という名は、同じ文書の呪文の中に神々の名の一つとして「ユ」 $\Upsilon\epsilon\omicron\upsilon$ （V.141）と唱えられており、『ギリシア語魔術パピルス』においては他に見られないが、グノーシスの文献には知られており、神あるいは魔術師として頻繁に言及される（*GMP*, p.335-336）。

(9) マネトン

no.17は予知と記憶力を授かる魔術である。表題「神聖な書物からの写し。」 $\text{Αντίγραφον ἀπὸ ἱερᾶς βιβ[λο]υ. (III.424)}$ 、後半に「この儀式に勝るものはない。マネトンによって試され、彼はこれを最も偉大な神オシリスからの贈り物として受け取った。」 $[\tau\eta\varsigma] \text{ πράξεως ταύ[της] μείζων οὐκ ἔστιν. πεπειράται ὑπὸ Μανεθῶν[ος, ὃς αὐτὴν ἐ]λάβετο [δῶ]ρον ὑπὸ θεοῦ [Ο]σίρεως τοῦ με[γί]στου. (III.439-440)}$ 。マネトンとはおそらく、有名な前3世紀のエジプト人の神官かつ歴史家を指すと考えられる（*GMP*, p.30, n.92）⁽¹⁹⁾。彼の名前は、no.214の文中「これをマネトンも自分の本の中で言っている」 $\text{ταῦτα δὲ ὁ Μανεθῶς ἔλεγε ἐν ἰδίᾳ βίβλῳ (XIII.23)}$ にも見られる。彼は『ギリシア史』で有名になったために、占星術や魔術などの他の本の著者に仮託されることとなった（*GMP*, p.173, n.8）⁽²⁰⁾。

(10) ウールピコス

no.194は成功と支持と勝利を得る指輪の魔術で、文中に「このウーフオルが、ウールピコスが使った(神)である。」 $\text{ὁ δὲ Οὐφωρ οὗτός ἐστιν, ᾧ Οὐρβικὸς ἐχράτο. (XII.317-318)}$ 。この人物については不明である⁽²¹⁾。彼の名前は hr-bik「ハヤブサ・ホロス」を意味する⁽²²⁾。

(11) テントラのズミニス

no.185の表題「テントラのズミニスの夢を送る（魔術）。」 $\text{Ὀνειροπομπὸς Ζμίνιος Τεντυρίτου. (XII.121-122)}$ 。この魔術のやり方を説明する冒頭に「オスタネスによれば」 $\text{κατὰ Ὀσάνην (XII.122)}$ という挿入句がある。テントラとは、ナイル河畔のデンデラのことであり、そこ出身のズミニスという魔術師については、他の史料では知られていない（*GMP*, p.157, n.36）。もしこの名前がNs-Mn「ミン神に属する者」ならば、彼はエジプト人かも知れない⁽²³⁾。

(12) パクラテス

no.65の中で「燃やし尽くす犠牲。ヘリオポリスの預言者パクラテスが披露した。

ハドリアヌス帝に不思議な自分の魔術の力を披露して、本当に（誰かを）1時間で連行し、2時間で病床につかせ、7時間で殺し、また皇帝自身に夢を送った。彼がその魔術に関する真実を完全に実証した時、その預言者に驚嘆し、2倍の賃金を彼に与えるよう命じた。」 ἐπίθυμα· ἐπεδείξατο Παχράτης, ὁ προφήτης Ἡλιοπόλεως, Ἀδριανῶ βασιλεῖ ἐπιδεικνύμενος τὴν δύναμιν τῆς θείας αὐτοῦ μαγείας. ἤξεν γὰρ μονώωρον, κατέκλινεν ἐν ὥραις β΄, ἀνεῖλεν ἐν ὥραις ζ΄, ὄνειροπόμπησεν δὲ αὐτὸν βασιλέα ἐκδοκ>ιμ<ά>ζοντος αὐτοῦ τὴν ὅλην ἀλήθειαν τῆς περὶ αὐτὸν μαγείας· καὶ θαυμάσας τὸν προφήτην διπλᾶ ὀψώνια αὐτῶ ἐκέλευσεν δίδοσθαι. (IV. 2446-2455)。

預言者パクラテスは、ルキアノス『嘘を好む人たち』(34)に現れるパンクラテスを指すと考えられる (*GMP*, p.83, n.310)。彼の名前は p 3-n- hrd 「子供 (ホルス) に属する者」の意味で、彼はメンフィス出身のヒエログラフ書記であり、一流の魔術師であった⁽²⁴⁾。これは明らかに金儲けを目論んだ、魔術師の売り込みの宣伝文句である。

2) ギリシア

(13) ダルダノス

no.55の表題「ダルダノスの剣。剣と呼ばれる儀式、効き目の故にこれに並ぶものはない。」 Ξίφος Δαρδάνου· πρᾶξις ἢ καλουμένη ξίφος, ἧς οὐδέν ἐστιν ἴσον διὰ τὴν ἐνέργειαν· (IV.1716-1718)。「剣」とは、特定の種類の呪文を表す表題の一種であるらしく (*GMP*, p.69, n.216)、この魔術が「剣」と呼ばれた理由は、金の板に書かれる呪文が剣の形に刻まれる、あるいは剣によって囲まれたからである (*GMP*, p.70, n.231)。魔術テキストの内容は、好きな女性の気持ちを自分に向かせるもので、恋愛魔術の一種である。ダルダノスは、ホメロスによれば、ゼウスが人間の女性から儲けた子供の中で最もお気に入りである (*Il.* 20. 304-305)、トロイ王家の祖先に当たるとされ (*Il.* 20. 215ff)⁽²⁵⁾、またサモトラケの秘儀の創設者とされている (*GMP*, p.69, n.217)⁽²⁶⁾。

(14) オルフェウス

no.217の呪文のバリエーションの一つとして、「預言者オルフェウスが彼の個人的なメモの中で伝えてきたことには。」 ὡς ὁ θεολ<ό>γος Ὀρφεύς παρέδωκεν διὰ τῆς παραστιχίδος τῆς ἰδίας· (XIII.933-934)。オルフェウスは、伝説的なトラキア人の詩人であり、この魔術パピルスが書かれた時代までには、有名な預言者とされており、多くの偽作が彼の名で伝えられるが、この呪文については、何も知られていない (*GMP*, p.193, n.128, n.134)。彼はアポロンとムーサの子とされ、歌手としてアルゴ―探検隊に同行したとされる⁽²⁷⁾。

(15) ホメロス

『ギリシア語魔術パピルス』のあちこちの文書に、出典を一々挙げるのが面倒なほど多くのホメロスの詩の断片が引用されている。ホメロスの詩『イリアス』と『オデュッセイア』が呪文や護符として盛んに使用されたからである（*GMP*, p.47, n.73）。例えば、no.61の表題「ホメロスの三行詩の補佐役。」Τρίστιχος Ὀμήρου πάρεδρος (IV.2145) に続いて、ホメロスの三つの詩の断片が書かれている。「こう言って、塹壕の上を、(省略)、単蹄の馬どもを追い渡した、」(*PGM*, IV.2145-2146, *Homer*, II.10.564, *GMP*, p.76, n.264)⁽²⁸⁾、「つわものどもも また 無慚な血糊うちに 喘いでいるのを認めるなり、」(*PGM*, IV.2146-2147, *Homer*, II.10.521, *GMP*, p.76, n.265)⁽²⁹⁾、「二人自身はといえば、夥しい汗みづくを 海に入って洗い落とした、」(*PGM*, IV.2148-2149, *Homer*, II.10.572, *GMP*, p.76, n.266)⁽³⁰⁾。これらの詩句が刻まれた鉄の板を身につけると、逃亡者は決して見つかることができなく、臨終の床にある人の上に置くとも何でも知りたいことを言わせることができ、呪詛されている人に海水をかけながら唱えさせると呪詛が解かれ(?)、競技者が身につけると負けないなどなど、これ以外にも様々な効力を発揮するという (IV.2145-2178)。no.34の表題「怒りを抑える (魔術)。」Θυμοκάτοχον (IV.467) に続いて、ホメロスの詩の断片が書かれている。「大胆にもゼウスに対して、凄まじいその大槍をお挙げになるなら。」(*PGM*, IV.468, *Homer*, II.8.424, *GMP*, p.47, n.73)⁽³¹⁾。どうやら、詩句の内容からの類感が魔術に働くと考えられていたようである。no.90の表題「ホメロス託宣。」[Ὀμηρομαντεῖον] (VII.1) に続いて、『イリアス』と『オデュッセイア』からの詩句216片が列挙されている。また no.342はホメロスの詩の別な断片集で、その末尾に解説文が続く。この部分のギリシア語原文は *PGM* に含まれていないので *GMP* の英訳から要約する。それによると、公表されていない詩句があるらしく、その原因の一つは、ペイストラトス一族が公表を差し控えた詩句があるからで、その全巻は、パレスチナ地方のエルサレムの文書館、カリア地方のニュサの文書館、そしてローマのパンテオンの文書館にあるといい、末尾に「ユリウス・アフリカヌスのケストス18」と書かれている (*GMP*, p.263-264)。「ケストス」とは「刺繍された」という意味であるが、その複数形「ケストイ」Κεστοί は、アフリカヌスの作品の名前である⁽³²⁾。セクストゥス・ユリウス・アフリカヌスは、3世紀のキリスト教徒の作家で、彼の作品は医学、農業、博物誌、軍事、ホメロス批評、魔術など、様々な内容を含んでいた (*GMP*, p.264)。ペイストラトスはアテナイの僭主で、前669/8年にアルコン職に就き、前565年頃のメガラとの戦争で名を馳せ、2回の追放の後に帰還し、前546年頃に僭主政を樹立し、前527年に没した⁽³³⁾。彼は古代末期においてはホメロスの詩の最初の校訂者とされた (*GMP*, p.263, n.12)⁽³⁴⁾。『イリアス』は前750年頃、『オデュッセイア』は前725年頃に書かれ、ギリシア最古で最大の詩人ホメロスの作品とされる⁽³⁵⁾。

(16) ペイストラトス →(15)を参照

(17) ピュタゴラス

no.157の表題「ピュタゴラスとデモクリトスの夢要求、占星術的夢占い師。」
Ὀνειραϊτητὸν Πυθαγόρου κ[αί] Δημοκρίτου ὄνειρόμαντις μαθηματικός. (VII.795-796)。
ピュタゴラスの名は、彼の数字に対する神秘主義的関心の故に、古代後期のテキストにおいて、占いや魔術と結びつけられるようになった (GMP, p.338)。ピュタゴラスは、ムネサルコスの子で、前6世紀中頃にサモス島で生まれ、前530年頃にクロトンに移住し、そこで彼の教団を創設し、マグナ・グラエキア地方における政治にも大きな影響を与えたが、亡命者としてメタポントンで没したと言われている⁽³⁶⁾。

(18) デモクリトス →(3)、(5)、(17)を参照

no.93の表題「デモクリトスのトリック。」*Δημοκρίτου παίγνια* (VII.167)の「トリック」と訳した*παίγνια*のドイツ語訳は*Scherzrezepte* (PGM, Bd.II, S.7)「悪ふざけのレシピ」、英訳は*table gimmicks* (GMP, p.119)「卓上手品」である⁽³⁷⁾。内容としては、青銅を金に見せかける方法、卵をリングのように見せる方法、料理人が火を点けなくする方法、ニンニクの匂いを消して食べやすくする方法、老婆のおしゃべりや飲みすぎをやめさせる方法、ガラスに描かれた剣闘士を戦わせる方法、冷たい食べ物を食べた人に火傷をさせる方法、人付き合いが苦手な人を上手くする方法、たくさん飲んでも酔わない方法、長旅をしても喉が乾かない方法、精力を強くする方法、必要な時に勃起させる方法が列挙されている。これらは饗宴の場で行われたトリックの数々であると考えられ、似たようなトリックはアテナイオスの『食卓の賢人たち』の至る所でも見られる (GMP, p.120)⁽³⁸⁾。no.195の表題「デモクリトスの球。」*Δημοκρίτου Σφαῖρα*. (XII.351)。「球」とはいつても、実際には円や他の平面な図形、この場合は長方形であり、そこには暦の日を表す1から30までの数字が、上の段と下の段に書かれている (GMP, p.165, n.88, p.166)。似たような「球」は、エジプト人の伝説的な占星術師ペトシリスの発明に帰されている (GMP, p.166)。これはある人が病気にかかった日の数字と自分の個人名の合計の数字 (ギリシア文字は数字でもあるから) を足した数を30で割って (GMP, p.165, n.90)、その数が上段の数字にあればその人は生きるが、下段の数字にあれば死ぬという予測法である。デモクリトスとは、前460-457年頃に生まれた哲学者、トラキア地方のアブデラのデモクリトスのことであり、彼は古代末期においては、エジプト人の神官から魔術を習った人物と考えられていた (GMP, p.334)⁽³⁹⁾。

(19) ケーリュクス →(7)を参照

(20) アガトクレス

no.184の表題「アガトクレスの夢を送る（魔術）。」Ὀνειροπο[μπός] Ἀγαθοκλέυς· (XII.107)。アガトクレスについては、何も知られていない（*PGM*, p.157, n.29）⁽⁴⁰⁾。

(21) エウエノス

no.217の呪文のバリエーションの一つとして、「エウエノスの覚書においては」
ἐν δὲ τοῖς Εὐήνου ἀπομνημονεύμασιν (XIII.964-965)。エウエノスという作家は何人か知られているが、この記述と関連する者はいない（*GMP*, p.193, n.133）。

(22) エロテュロス

no.217の呪文のバリエーションの一つとして、「エロテュロスは彼の『オルフィカ』で。」Ἐρώτυλος ἐν τοῖς Ὀρφικοῖς· (XIII.946-947)。エロテュロスは一度だけ、錬金術師のゾシモスによって引用されており、「全なる者」の権威とされるが、他の史料では知られていない（*GMP*, p.193, n.129）⁽⁴¹⁾。『オルフィカ』は『オルフェウス論』の意味である。「エロテュロス」という語は、他にも VII.478と CXXXIIIa にも見られるが、それらは「恋愛魔術」の意味で使われているようである（*GMP*, p.318, n.9）。すると、エロテュロスは人名ではなく、「『オルフィカ』に引用されたエロテュロス（恋愛魔術）」と訳せる可能性もある（*GMP*, p.193, n.129）。

(23) テッサリア人女フィリンナ

no.331の表題「テッサリア人女フィリンナの頭痛に対する呪文。」Φιλίννης Θε[σο]αλῆς ἐπαοιδῆ π[ρὸς] κεφαλῆς π[ό]νον· (XX.13-14)。この魔術は *historiola*⁽⁴²⁾ であるように思われる（*GMP*, p.259, n.5）。フィリンナについては、他の史料で知られていない⁽⁴³⁾。

(24) ヒエロス

no.217の呪文のバリエーションの一つとして、「またヒエロスは次のように（書いている）。」Ἱερός δὲ οὐτως· (XIII.953)。ヒエロスについては、何も知られていない（*GMP*, p.193, n.130）。

(25) ピュロス

no.217の呪文のバリエーションの一つとして、「またピュロスの（諸作品に書かれている）ように。」ὡς δὲ ἐν τοῖς Πύρρου· (XIII.968-969)。ピュロスという名は多く知られているが、この魔術と関係しそうな人物は不明である（*GMP*, p.193, n.135）。

(26) テュアナのアポロニオス

no.175の表題「テュアナ人アポロニオスの年老いた女召使い。」Γραῦς Ἀπολλων[io]υ Τυανέως ὑπηρετίς (XIa.1)。定められた儀式をすると、絵も言われぬほど美しい、家の女主人と呼ばれる女神がロバに乗って出現するが、ロバから降りると老婆になり、魔術者のそばにいる間、何でも望みを叶えてくれるという。末尾に「この儀式は実証された。」ἡ πράξις δεδοκίμασται (XIa.40) とある。テュアナのアポロニオスは、新ピュタゴラス派の聖人であり、1世紀の初めにカッパドキア地方のテュアナで生まれ、苦行者として世界を旅したと伝えられる⁽⁴⁴⁾。しかし最初はアスクレピオス神殿の神官であった。

(27) ヒメリオス

no.183の表題「ヘメリオスによる(魔術)。」[Τ]ὰ παρὰ Ἡμερίου (XII.96)。これは商売繁盛をもたらすための魔術である。ヘメリオスは、4世紀の医者ヒメリオス Himerios のことか (*GMP*, p.156, n.24)⁽⁴⁵⁾。

3) ユダヤ

(28) アブラハム、(29) イサク、(30) ヤコブ

no.339の表題「ヤコブの祈り。」Προσευχή Ἰακώβ. (XXIIb.1, cf.26)。ヤコブは、ユダヤ人の族長の一人であり、アブラハム、イサクとともにしばしば魔術の文脈で現れる (*GMP*, p.336)。例えば、no.358「(我は) 汝ら全てに厳命す、アブラハムとイサクとヤコブの神にかけて、」ἐξορκίζω ὑμᾶς πάντας κατὰ τοῦ θεοῦ τοῦ Ἀβράμ καὶ Ἰσαὰ καὶ Ἰακώβ, (XXXV.13-14)、no.217「何となれば(我は) アブラハム、イサク、ヤコブそして偉大な神霊の力を我がものとしたが故に」ὄτι προσελημμαι τὴν δύναμιν τοῦ Ἀβραάμ, Ἰσαὰ καὶ τοῦ Ἰακώβ καὶ τοῦ μεγάλου θεοῦ δαίμονος (XIII.816-818)、no.217「ヘブライ語の『法』の中で説明されていることには、アブラハム、イサク、ヤコブ。」ὡς δ' ἐν τῷ Νόμῳ διαλύεται ἀβραϊστί· Ἀβραάμ, Ἰσαὰ, Ἰακώβ· (XIII.975-976)。これはユダヤ教の聖書タナハにおけるアブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神が魔術とのこじつけで言及されたものであろう (*GMP*, p.194, n.137)。その他、呪文中に含まれるもの (XII.287)⁽⁴⁶⁾、呪文の前に置かれたもの (XIII.976) がある。これら三人はユダヤ人の族長であり、『出エジプト記』(3.15) には「アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神」と記されている⁽⁴⁷⁾。アブラハムは『創世記』におけるイスラエル民族の祖であり、彼は一族をメソポタミアのウルから引き連れ、カナンで埋葬された (*REAMR*, Abraham, p.5)⁽⁴⁸⁾。イサクはアブラハムの息子で、神はアブラハムの信仰心を試すためにイサクを犠牲に捧げよと命じた (*REAMR*, Isaac, p.455)。ヤコブはイサクの息子で、12人の息子をもうけ、彼らがイスラエル十二支族の祖となった

(*REAMR*, Jacob, p.466)。

(31) モーセ

no.146の表題「モーセの『ディアデーマ』より。」*Ἐκ τοῦ Διαδήματος Μουσεως*. (VII.619)。これは透明人間になったり、女性にモテたりする魔術で、『ディアデーマ』*διάδημα* はモーセの著書であり、意味は『王冠』である。モーセは、グレコ・ローマン期において広く、偉大な魔術師として認識されていた (*GMP*, p.337)。プリニウス『博物誌』(30.11)は、モーセが自分の魔術学派を設立したと述べているほどである。このようにユダヤ人も非ユダヤ人も魔術師としてのモーセに繰り返し言及し、彼の名で書かれた魔術書が出回ったので、彼の魔術師としての名声が高まった (*GMP*, p.172, n.2)⁽⁴⁹⁾。ヤコブの息子ヨセフは、彼を嫌う兄弟たちによって奴隷としてエジプトに売られて行ってしまった⁽⁵⁰⁾。こうしてエジプトにもイスラエル人が住むようになり、やがて人口が増えるとファラオに疎まれ、迫害を受けるようになる。そこでイスラエル人をエジプトから脱出させたリーダーがモーセである⁽⁵¹⁾。また no.81に「我はモーセなり、汝の預言者、」*ἐγώ εἰμι Μουσῆς ὁ προφήτης σου*, とある (V.108-109)。

(32) ソロモン

no.43の表題「ソロモンの癲癇（を起こさせる魔術）、子供にも大人にも効く。」*Σολομῶνος κατὰπτωσις, καὶ ἐπὶ παιδῶν καὶ τελείων ποιούσα*. (IV.850-851)。癲癇はトランス状態（魂が抜けた状態）に陥ることを指している (*GMP*, p.55, n.116)。表題に続いて注意書き「(私は)あなたに誓います、聖なる神々および天の神々にかけて、ソロモンの研究成果を誰にも分け与えません、また本当に些細なことのために行いません、あなたに必要が差し迫るときを除いては、とにかくあなたに激怒が保たれることがないように。」*ὄμνυμί σοι θεοὺς τε ἀγίους καὶ θεοὺς οὐρανίους μηδενὶ μεταδοῦναι τὴν Σολομῶνος πραγματείαν μηδὲ μὴν ἐπὶ του εὐχεροῦς πράττειν, εἰ μὴ σε πρᾶγμα ἀναγκαῖον ἐπέιξη, μὴ πῶς σοι μῆνις τηρηθείη*. (IV.851-856)。これほど効果があるので乱用しないようにとの警告であるが、定型の宣伝文句にも聞こえる。no.72の本文中「何となれば(私は)汝に厳命す、ソロモンがエレミアの舌の上に置いた印章にかけて、」*ὅτι ὀρκίζω σε κατὰ τῆς σφραγίδος, ἧς ἔθετο Σολομῶν ἐπὶ τὴν γλῶσσαν τοῦ Ἱηρεμίου*, (IV.3039-3041)。「印章」とは有名な護符のことである (*GMP*, 96, n.394)⁽⁵²⁾。その他、「ソロモンの目」やソロモンの名が呪文中に置かれたものもある⁽⁵³⁾。エジプトを脱出したイスラエル人たちは、後に王国を築いた。ダビデ王の子ソロモンは前10世紀のイスラエル王国の王であり、エルサレム神殿を建設し、伝承によれば、初期の偉大な魔術師の一人であり、偉大な力を持ち、ジンと呼ばれる悪霊の軍団を指揮したとされる (*Guiley* [2006], p.295)⁽⁵⁴⁾。

③ イエス

no.47は悪霊を払う魔術で、ギリシア語テキストの冒頭にコプト語の呪文が挿入されている。筆者（前野）はコプト語が読めないので、*GMP*の英訳から訳した。「ようこそアブラハムの神よ、ようこそイサクの神よ、ようこそヤコブの神よ、ようこそイエス・クレストス ἸΗΣΟΥΣ ΠΙΧΡΗΚΤΟC よ、聖霊よ、その父のその息子よ、七の上にある者よ、七の内にある者よ。イアオー・サバオートを連れて来い。汝らの力が彼何某から流れ出ますように、汝らが彼の中にいるこの汚れたデーモン・サタンを追い出すまで」(IV.1231-1239, *GMP*, p.62)⁽⁵⁵⁾。no.16にも同様に、コプト語の呪文が挿入されており、その中に「イエス」ΙΗΣΟΥCの名がある(III.420)。既に見たピベキスの悪霊払いの魔術 no.72には、「(我は)汝に厳命す、ヘブライ人たちの神イエスにかけて。」ὀρκίζω σε κατὰ τοῦ θεοῦ τῶν Ἑβραίων Ἰησοῦ (IV.3019-3020)とある。また不眠を引き起こす魔術 no.197の呪文にも、「イエス」Εἰησοῦςの名が含まれている(XII.391-392)。その他、no.191「熊座への夢占いの要求」(XII.192)とno.541「発熱に効く護符」(CXCVIII.1-11)にも、呪文の中にイエスの名が含まれている。ルカ『使徒行伝』(19.11-20)に見えるように、イエスの名は1世紀後半には悪霊払い師として有名であった。

4) シリア

④ シリア人女ガダラ

no.330の表題「シリア人女ガダラのあらゆる炎症に対する呪文。」Σύρας <Γ>αδαρηνής [ἐπαιοιδή] πρὸς πᾶν κατάκαυμ[α]. (XX.4-5)。ガダラについては、他の史料で知られていない⁽⁵⁶⁾。

5) ペルシア

⑤ ゾロアスター

no.217の呪文のバリエーションの一つとして、「ペルシア人ゾロアスターが・・・の中で(書いているように)。」ὡς Ζωροάστρης ὁ Πέρσης ἐν <> (XIII.967)。ゾロアスターは、オルフェウスと同様に、文書捏造者の格好の標的であった(*GMP*, p.193, n.134)。ゾロアスターとは⁽⁵⁷⁾、イラン語のザラスシュトラのギリシア語化したもので、預言者ゾロアスターが新宗教の改革者であるのか創始者であるのかは明確でない。アヴェスタの古部であるガーサーは、ゾロアスター自身に帰されるが、そこで彼はマンスラーン「聖なる呪文を所有する者」と呼ばれる。彼が実在の人物であったかについては、疑われることもあるが、後世のゾロアスター教徒の伝承に基づけば、前6世紀の人とされ、言語学的な根拠に基づけば、前1000年頃の人であり、後

『ギリシア語魔術パピルス』にみる魔術師たちの自画像（前野）

者の説の方がより有力である。ギリシア人はゾロアスターを既に前5世紀には知っており、プラトンやアリストテレスの時代には、彼の教義の概念が幾らか知られていた。彼はしばしば「魔術師」magusあるいは「賢者」sophosとみなされ、伝説的なディテールが彼の周りに積み上がって行った結果、神学、博物学、占星術、魔術に関する多くの作品の著者と誤解された。

(36) オスタネス →(3)、(4)、(11)を参照

(37) アストラプスーコス

no.169の表題「アストラプスーコスの恋愛呪縛。」Φιλτροκατάδεσμος Ἀστραψούκου。(VIII.1)。ディオゲネス・ラエルティオス『ギリシア哲学者列伝』の「序言」(1.2)によれば、Astrampsychosは、オスタネスと並ぶベルシア人魔術師の名である(*GMP*, p.145, n.1)⁽⁵⁸⁾。

(38) オコス（アルタクセルクセス3世） →(6)を参照

6) ローマ

(39) クラウディウス・プトレマイオス

no.217の呪文のバリエーションの一つとして、「また『プトレマイカ』の第5巻にあるように、」ὡς δὲ ἐν τῇ εἴτῳ Πτολεμαϊκῶν, (XIII.978-979)。天文学者であり占星術師でもあったクラウディウス・プトレマイオス（100-178年頃）も⁽⁵⁹⁾、誤って魔術師とされる犠牲者の一人であった(*GMP*, p.194, n.138)。

(40) ユリウス・アフリカヌス →(12)を参照

(41) クラウディアヌス

no.159の表題「クラウディアヌスの月の（魔術）と月の（魔術）の際の天と大熊座の儀式。この書物自身は、十二神のものであり、アフロディトポリスにある最も偉大なアフロディテ・ウラニア女神のもとで発見された。」Κλαυδιανού σεληνιακὸν καὶ οὐρανοῦ καὶ ἄρκτου τελετὴ ἐπὶ σεληνιακῶν. ἡ βίβλος ἥδ' αὐτή, <δ>ώδεκα ἰδίᾳ θεῶν, ἠυρέθη ἐν Ἀφροδιτοπόλει <παρα> τῇ θεᾷ μεγίστῃ Ἀφροδίτῃ Οὐρανίᾳ, [ἦ]τις τὰ πάντα περιέχει。(VII.862-865)。クラウディアヌスは、哲学者かつ錬金術師であるかもしれない(*GMP*, p.141, n.140)⁽⁶⁰⁾。

第3章 魔術文書を書き継いだ者たち（レベル2）

ギリシア人は、プトレマイオス朝時代になって、ギリシアのヘルメス神とエジプトのトト神を同一視するようになった⁽⁶¹⁾。トト神は文字と知恵と魔術と癒しの神であり、ヒヒの姿あるいはトキの姿をしており、トキの頭部を持つ姿では、手に書板とペンを持ち、最後の審判において心臓の計量結果を記録している様子が『死者の書』に描かれている⁽⁶²⁾。ヘルメス神も同様に、知恵と魔術を司り、魔術の杖カドゥケウスを持ち、死者を冥界へと誘い、両神とも神聖な書物を書いたとされる⁽⁶³⁾。

1) 「セトナ・カエンワセト物語」

トト神が直筆した魔術本を人間が盗み出すという物語がエジプトにある。いわゆる「セトナ・カエンワセト物語」で（cf. *GMP*, p.xlii-xliii）、「第一カエンワセト」（プトレマイオス朝期）と「第二カエンワセト」（初期ローマ時代）があり、デーモティックで書かれたものではあるが、どちらも長い時代を書き継がれたものと考えられる⁽⁶⁴⁾。ここで取り上げるのは前者で、その主人公は、第19王朝の王ラムセス2世（治世：前1279-1213年頃）⁽⁶⁵⁾の存在した王子カエンワセトであり、彼はプタハ神の神官で *sm* あるいは *stm* という称号を持っていた⁽⁶⁶⁾。彼は、父親が長生きしすぎたために、父より早く亡くなり、王になれなかったが、最初のエジプト学者とも呼ばれ、古い記念碑や建築物に興味を持ち、第5王朝（前2479-2322年頃）⁽⁶⁷⁾の王ウナスのピラミッドを修復したことで知られる⁽⁶⁸⁾。

彼の物語には、古代エジプトの魔術本がどこにどのような形で保管されていたかが目に見えるように描かれていて興味深い。子供向けではあるが、日本語の訳があるので、その冒頭だけ引用する。「この王子は小さいうちから、学問が好きでしたが、成長した後には非常な学者になって、なんでも知らないことはないといわれるほどでした。王子は暇さえあれば、メンフィスの廟所を巡って古い絵文字で書いた書物や、魔術の書物を捜したり、石碑や神殿の壁へ彫りつけてある文字を読むのを楽しみにしておりました。王子はエジプト中に並ぶもののないほどの魔術者でしたから、護符の用い方も知っていれば、また自分でこしらえることも知っていました。ある日、王子はいつものように碑文などを読みながら、プターの神殿の広場を歩いていると、・・・」と物語は始まる⁽⁶⁹⁾。

荒筋は次の通り。その時、ある男が自分を見て笑っていたので、セトナがその理由を尋ねると、そんな文書とは比べ物にならないくらい素晴らしい、トト神自らが書いた魔術本があると教える。その本がどうしても欲しくなったセトナは、それが隠されている墓を見つけ出し、奪おうとする。するとそこに埋葬されているネフェルカプターの妻のミイラが起き上がり、自分たちも究極の知恵を得ようとして、こ

『ギリシア語魔術パピルス』にみる魔術師たちの自画像（前野）

の本を手に入れたばかりに、親子ともども命を落とす羽目になったと論し、諦めさせようとする。しかしその忠告を聞かず、セトナはその本を奪い、その魔術の力に酔いしれるが、その本の本来の持ち主であるトト神が怒り、前の所有者の忠告通り、セトナは財産と家族を失うことになる⁽⁷⁰⁾。この物語は、人知を超える知恵を得ようとする人間には神罰が降るという教訓譚であり、ネフェルカプターもセトナと同様、神の知恵に憧れた魔術師だったのだろう。

この物語で注目したいのは、魔術は書物や碑文に書かれ、神殿や墓地に保管されていたらしいということである。事実、19世紀のヨーロッパに大量の魔術パピルスをもたらしただアナスタシが、いくつかの文書をテーベの一つの墓か一つの神殿の中で発見したことは上に述べた。従って、この物語が描くように、魔術が書かれた書物や碑文が神殿や墓に保管されたことは、あながち嘘ではないのかも知れない。また『ギリシア語魔術パピルス』の中でも、魔術の典故として、「聖なるステーレー」や「聖なる文書」がしばしば言及される。

2) 聖なるステーレー

「ステーレー」という語は、魔術パピルスにしばしば見られるが、三つの意味がある。(ア)ももとは碑文が刻まれた石や金属の板を指すが(例えば、VIII.42)、(イ)大抵の場合は比喩的表現として、石の板に刻まれていた碑文のコピーを指し、(ウ)また石板の形をした護符(例えば、VII.215)を指すこともある(*GMP*, p.60, n.158)。

no.45の表題「隠されたステーレー。」*Στήλη ἀπόκρυφος* (IV.1115)。この場合はおそらく(イ)に該当し、この讃歌が元々は石板か金属板に書かれた碑文であったことを示唆している。no.106の表題「アフロディテのステーレー、」*Ἀφροδίτης στήλη*, (VII.215)。これは友情、好意、成功、友人を得るための錫の板でできたお守りのようなもので、文章の下に挿絵が描かれており、長方形の板の中に三角が書かれている。このステーレーは上で分類した(ウ)に属し、ステーレーとは、このような三角形や先が尖った石板ないし金属板のイメージであったことが分かる(*GMP*, p.122, n.12)。no.46の表題「何にでも役に立つステーレー、死からも守ってくれる。それに書かれていることを詮索するな。」*[Σ]τήλη πρὸς πάντα εὐχρηστος, ῥύεται καὶ ἐκ θανάτου. μὴ ἐξέταζε τὸ ἐν αὐτῇ.* (IV.1167-1168)。これは護符の作り方である。「詮索するな」*μὴ ἐξέταζε* とは、その効き目を疑って、色々調べたり試したりする必要はないという意味であろう。強力な宣伝文句である。no.166の冒頭「そして下にあるステーレーもしばしば唱えよ。」*καὶ λέ[γε] πολλάκις τὴν ὑπο[κειμένην] στήλην.* (VII.1008-1009)。これは目的不明の魔術である。実際には、この文書はこの一文で終わっているのだから、「下にある碑文の写し」*τὴν ὑπο[κειμένην] στήλην* とは、下にある別な魔術文書に書かれた呪文を指すのだろうか。no.85の文中「絵の

パピルスに書かれたステーレー。」 στήλη ἐν τοῖς χάρτεσι γραφομένη τοῦ ζωδίου· (V.423-424)。これは啓示を得る魔術である。no.169の恋愛呪縛には「汝の真の名は、汝が生まれたヘルムーポリスにある至聖所の中にある聖なるステーレーに刻まれている。」 τὸ δὲ ἀληθινὸν ὄνομά σου <ἐπ>εγραμμένον <ἐστὶ τῇ ἱερᾷ στήλῃ ἐν τῷ ἀδύτῳ ἐν Ἐρμούπολει, οὗ ἔστιν ἡ γένεσις σου. (VIII.41-43) とあり、これは (ア) に該当する。

3) 聖なる文書

これはおそらく『ギリシア語魔術パピルス』のような巻物や冊子を指すのだろう。no.343は神託伺いで、その冒頭に「ヘルメスの宝物庫の中で発見された神聖な書物の写し。」 ἀντίγραφον ἱερᾶς βίβλου τῆς εὐρεθείσης ἐν τοῖς Ἐρμού ταμίσις. (XXIVa.2-4) と、この文書の出所が示されている。「宝物庫」は「文書館」でもあったのだろう (GMP, p.264)。また no.519ある恋愛魔術の冒頭には「『ヘルメス』と呼ばれる神聖な書物からの呪文の引用、ヘリオポリスの神殿の最も奥の社で発見された、エジプトの文字で書かれているが、ギリシア文字に翻訳されている」⁽⁷¹⁾ と、その引用元が書かれている。「神殿の最も奥の社」も文書館のことである (GMP, p.316, n.3)。このヘルメスとは、ヘルメス・トリスメギストスのことである (GMP, p.316, n.2)。

4) 神殿魔術から民間魔術へ

no.198の冒頭の説明書き「神聖文字の書記たちが使用した聖なる（書物）から翻訳された説明書き。多くの者たちの探究心の故に、（神聖文字の書記たちは、自分たちが）使用した植物や他の物（のリスト）を神々の像に刻み、間違いの結果の故に（多くの者たちが）無駄な努力をすることがないように配慮した。また我々（神聖文字の書記たち）は、解決法を多くの写本やあらゆる隠された（書物）から集めた。」 Ἐρμηνεύματα ἐκ τῶν ἱερῶν μεθρημνευμένα, οἷς ἐχρῶντο οἱ ἱερογραμματεῖς, διὰ τὴν τῶν πολλῶν περιεργίαν τὰς βοτάνας καὶ τὰ ἀλλ[λ]α, οἷς ἐχρῶντο, εἰς θεῶν εἰδῶλα ἐπέγραψαν, ὅπως μὴ εὐλαβούμενοι περιεργάζωνται μηδὲν διὰ τὴν ἐξακολούθησιν τῆς ἀμαρτίας. ἡμεῖς δὲ λύσεις ἡγάγομεν ἐκ τῶν πολλῶν ἀντιγράφων καὶ κρυφίμων πάντων. (XII.401-407)。以下にそれらの物のリストがある。翻訳とは、符丁から普通の言葉への翻訳か、それともヒエログリフからギリシア語への翻訳か、その両方か。何れにしても、これは神殿魔術から民間魔術への魔術の広がりを示している。

5) 魔術師たちの横のつながり

no.85の本文中の所々で、別のやり方が紹介されているが、「また（私は）ヘラク

『ギリシア語魔術パピルス』にみる魔術師たちの自画像（前野）

レオポリスのある男から聞いた、] ἀκήκοα δὲ παρὰ Ἡρακλεοπολιτικοῦ τινος, (V.372-373)、「再びヘラクレイオポリスの男から（聞いた）如く」 καθὼς πάλιν παρὰ τοῦ Ἡρακλεοπολιτικοῦ (V.383)、「彼らは言っている。」 οἱ δὲ λέγουσι· (V.390-391) は、情報が伝聞であることを明記している。教師からの情報 (*GMP*, p.107, n.45)、あるいは行きずりの同職者、同職者のサークル(学会あるいは研究会)の存在を推測させる。

第4章 現存する魔術文書の著者たち（レベル3）

最後に、現存する魔術文書の著者たちについて考察する。現存する全ての文書を扱うことは出来ないので、ここでは特徴的な5文書を選んだ (*PGM* IV, V, VII, XIII, XXXVI)。このうち IV と V と XIII は「アナスタシ・コレクション」の一部であり⁽⁷²⁾、発掘状況は不明であるが、テーベにある一つの墓あるいは一つの神殿の文書館に由来するものと考えられ (*GMP*, p.xlii)、これら3文書は、すべて一人の手によって書き写されたものであるが (*Dickie* [2001], p.203)、原本の著者は別々である。

1) 第IV巻 (no.25-77) の著者

文書情報：パリ国立図書館に所蔵 (*P. Bibl. Nat. Suppl.* gr. no. 574)、その長大さから「パリ大魔術パピルス」の異名、縦27-30.5cm 横9.5-13cm、表裏両面に書かれた36枚のフォリオからなるパピルスの冊子、3274行、77文書、書式は *transversa charta*、時代は4世紀、アナスタシがテーベで発掘 (*PGM*, Bd.I, S.64-66, *GMP*, p.xxiii)。特徴：イラストはない。文書の内容は様々で、同種の文書が並べて書かれる傾向が見られるが、ばらつきもある。植物を摘む時の呪文はあるが (no.32, no.71, おそらく薬草)、医療系の文書はない。巻の冒頭にコプト語を含むバイリンガル文書が4点 (no.25, no.27, no.28, no.29, no.30) ある⁽⁷³⁾。no.29の表題は「ヘリオスに対する他の(写し)。」 Ἄλλη πρὸς ἥλιον· (IV.88) なので、同様の文書が先行しなければならないが、先行する no.28は悪霊に対する護符であり、内容が合わない。また、冗長な宣伝文句と別バージョンの表示が目立つ。例えば、no.33の表題「すばらしい恋愛呪縛。」 Φιλτροκατάδεσμος θαυμαστός· (IV.296)、本文中に「他には」 ἄλλως (IV.463)。no.47の表題「悪霊を追い出す正真正銘の呪法。」 Πράξις γενναία ἐκβάλλουσα δαίμονας· (IV.1227)、本文中に「別な(護符)も」 καὶ ἄλλο (IV.1262-1263)。no.49の表題「何にでも効く熊座の(魔術)。」 Ἀρκτική πάντα ποιούσα. (IV.1275)。no.56の解説「誰にも教えるな、なぜならば余りにも強く、無比なるもので、誰に対しても同日に効き、全く並外れ、余りにも最強だからである。」 Μηδένα δίδασκε. ἔστιν γὰρ καρτερόν λίαν καὶ ἀνυπέβλητον, ποιοῦν πρὸς πάντας αὐθήμερον, ἀπλῶς ἐσχημένως, λίαν καρτερώτατον. (IV.1872-1877) などなど。人物像：長大な文書であり、イラス

トがないことから、第IV巻の著者は、研究者肌の人物と思われるが、冗長な宣伝文句を好むことから、商業的性格も窺われる。医療系にはあまり関心がないようである。

2) 第XIII巻 (no.214-217) の著者

文書情報：ライデン国立古代博物館に所蔵 (P. Lugd. Bat. J 395 (W))、縦15cm 横26.5cm、8枚の二倍のフォリオが折って重ねられて二本のパピルスの紐で結ばれたパピルスの冊子、25コラム、1078行、4文書、時代は4世紀、アナスタシから購入、出土場所の記載はない (PGM, Bd.II, S.86, GMP, p.xxiii)。行数の長さは第IV巻に次ぐもので、文書数が少ない分、個々の文書が非常に長い。特徴：イラストはなく、効き目の宣伝文句もない。この巻に含まれる4文書は、いずれもモーセの魔術に関するものである。no.214の表題「聖なる名に関する『単一』あるいは『モーセの第八書』と呼ばれる聖なる書物。」 Βίβλος ιερά έπικαλουμένη Μονάς ή Όγδόη Μουσέως περι τοϋ όνόματος τοϋ άγιου. (XIII.3)。no.215の表題「『第八書』あるいは『聖なる(書物)』と呼ばれるモーセの聖なる隠された書物。」 Μουσέως ιερά βί<β>λος άπόκρυφος έπικαλουμένη όγδόη ή άγία: (XIII.343-344)。no.216に表題はないが、本文末尾に「モーセの単一、又の名を七つの天空帯の註釈書とも呼ばれる」 Μουσέως Μονάς, ή και ύπόμνημα έπικαλουμένη, έπτάζωνος (XIII.724-727)、続いて「『モーセの秘密の第八書』。(私が) 見つけた他の(写本)には(次のように)書かれていた。『偉大な名に関するモーセの隠された書物、何にでも効く』、その中には、全てを支配する名が(書かれて)ある。」 Μουσέως άπόκρυφος ή. έν άλλω <δ> εϋρον, έγέγραπτο· Μουσέως άπόκρυφος βίβλος περι τοϋ μεγάλου όνόματος, ή κατά πάντων, έν ή έστιν τó όνομα τοϋ διοικοϋν<τος> τά πάντα. (XIII.731-734)。no.217も表題はないが、様々な呪文のバリエーションを列挙する中で、「またモーセが『大天使』の中で(言っている)ことには。」 ώς δέ Μωϋσής έν τή Αρχαγγελική· (XIII.970-971)、「『月に対するモーセの隠された(呪文)』。」 Μουσέως άπόκρυφος Σεληνιακή· (XIII.1057)、「『モーセの隠された第十書』。」 Μουσέως άπόκρυφος ή Δεκάτη. (XIII.1077-1078)とある。第XIII巻の著者自身がモーセの『鍵』 'Κλεις' という書物の著者であり (GMP, p.172, n.2)、自著にしばしば言及しており (XIII. 21-22, 30-31, 35-36, 59-60, 228-229, 282-283, 431-432, 735-743)、その内容から見て『鍵』も魔術のマニュアル本であったことが分かる (GMP, p.172-173, n.8)。人物像：これも長大な文書であり、モーセの名を冠する書物の収集家であり、モーセに関する書物の著者でもあること、またイラストがなく効き目の宣伝文句もないことから、第XIII巻の書き手は、モーセの魔術の研究者であり、この巻は研究書であったと言えるだろう。

3) 第 VII 卷 (no.90-167) の著者

文書情報：ロンドン大英博物館に所蔵（*P. Lond.* 121）、縦33cm 横200cm、表裏両面に書かれたパピルスの巻物、表面 2 コラム + 17 コラム（1* - 66* 行 + 1 - 592 行）、裏面 13 コラム（593 - 1026 行）、78 文書、時代はコラム XXVIII まで 3 世紀、コラム XXIX から 4 世紀、出土地などの記載はない（*PGM*, Bd.II, S.1, *GMP*, p.xxiii）。行数は第 XIII 卷とほぼ同じであるが、個々の文書が短い。特徴：イラストは 4 点（no.106, no.114, no.143, no.162）。効き目に関する派手な宣伝文句はなく、せいぜい「よい」*καλόν* (VII.385, VII.969)、「本物の」*γενναῖον* (VII.396)、「最もよい」*κάλλιστον* (VII.459)、「驚くべき」*θαυμαστόν* (VII.919) 程度で、文書の内容は様々である。筆頭の no.90 には、ホメロスの詩の断片が列挙されているが、その末尾に「(以上で) ホメロス託宣の詩は終わりです。うまくいきますように。」*τέλος ἔχει τῶν ἐπῶν Ὀμηρομαντείου ἐπ'ἀγαθῶν*. (VII.148) の一文があり、実用性を示唆する。続いて、虫除け、偏頭痛、目やに、咳、男性病、女性病など、日常医療に関する文書（no.91, no.96, no.97, no.98, no.99, no.100, no.101, no.102, no.103, no.104, no.105, no.107, no.111）が集中しており、これも実用性を示唆する。また、悪霊に対する護符の作り方も 5 点（no.105, no.107, no.116, no.117, no.143）ある。古代において病気と悪霊に憑かれることは同じであった。また no.93「宴会でのいかさま」は、魔術というより手品のやり方の解説であり、この魔術書の読者の性質を示唆する箇所として注目される。人物像：日常的な医療や悪霊払いに関する文書が目立つことから、第 VII 卷の著者は、医者だったのかも知れない。またイラストはあるものの、派手な宣伝文句はないことから、控えめな人物であり、宴会でのいかさまなど、日常的な魔術を好む傾向が見られる。

4) 第 V 卷 (no.78-87) の著者

文書情報：ロンドン大英博物館に所蔵（*P. Lond.* 46）、縦28cm 横21cm、両面に書かれた 7 枚のフォリオからなるパピルスの冊子、最初の葉は喪失、489 行、10 文書、時代は 4 世紀、テーベにおいてアナスタシから購入（*PGM*, Bd.I, S.180-181, *GMP*, p.xxiii）。特徴：イラストは 3 点（no.80, no.84, no.80）。魔術の内容は、他の文書と同様「知る」ことが多い。指輪を使った魔術が 3 件（no.83, no.84, no.86）あるのが特徴である。別バージョンの表示も目立つ。例えば、no. 78 の本文中に「また他の諸写本には「満月の時に」と書かれている。」*ἐν δὲ ἄλλοις ἀντιγράφοις ἐγγράπτο ὅτι 'πληθοῦσης'*. (V.51-52)。また no.81 は悪霊を祓う方法で、続く no.82 には「他に。」*Ἄλλως* (V.172) という表題のもとに、泥棒を見つけ出す魔術が書かれて、文脈に合わない。no.82 は本来 no.80「泥棒を見つけ出す魔術」の後に置かれるべきもので

あった (*GMP*, p.104, n.16)。no.84は指輪を使った呪詛の方法で、本文には似て非なる文章の重複や矛盾がいくつも見られる。おそらく同様の魔術に関する複数の魔術本からの抜き書きが、未整理のままにされたものと思われる。従ってこの文書の完成度は低い。no.85から同業者どうしの横のつながりが見られることは既に述べた。人物像：未整理の資料があることから、第V巻の著者は、様々な文献を読み、資料を抜き書きし、研究ノートを作り、同業者から情報を収集するという、熱心な研究者であったように思われる。

5) 第XXXVI巻 (no.359-377) の著者

文書情報：オスロ大学図書館に所蔵 (*P. Osl.* I, 1)、縦24.3cm 横244cm、パピルスの巻物、12コラム、371行、19文書、時代は4世紀、エイトレムがファイユームで購入 (*PGM*, Bd.II, S.162-163, *GMP*, p.xxiv)。特徴：内容は様々であるが、恋愛に関するものが目立ち、避妊のお守りも含まれる。最も驚くのは、どの文書もコラムをまたぐことがないように書かれている点で、何より見易さを重視して書かれたことが分かる。また可愛らしいイラストが7点 (no.358, no.359, no.360, no.361, no.362, no.365, no.368) 添えられていることも興味深い。一つの文書の一つのコラムに収めるためにあらかじめ大きな余白を取り、空いたスペースにイラストをはめ込んだのだろう。完成度の高い文書である。また派手な宣伝文句が多いことも特徴である。例えば、no.359の表題「呪縛の(魔術)、何にでも効く。」*Κάτοχος, εις πάντα ποιῶν.* (XXXVI.1)。no.360の表題「怒りを抑え、好意を得、法廷の勝利(を得る)最良の(魔術)、王に対してさえも効く、これに勝るものは無し。」*Θυμοκάτοχον καὶ χαριτήσιον καὶ νικητικὸν δικαστηρίων βέλτιστον, μέχρις καὶ πρὸς βασιλέας ποιεῖ, οὐ μῖζον οὐδέν.* (XXXVI.35-37)。no.361の表題と解説「連行(魔術)、最高の着火剤、これに勝るものは無し。男たちを女たちに、また女たちを男たちに引き寄せ、そして処女たちを家から猛ダッシュさせる。」*Ἀγωγή, ἔμπυρον βέλτιστον, οὐ μῖζον οὐδέν. ἄνδρᾱ δὲ ἄνδρας γυνεξίν καὶ γυνέκας ἄνδρεσιν καὶ παρθένους ἐκπηδᾶν οἰκοθεν ποιεῖ.* (XXXVI.69-71) など。その他、「これに勝るものは無し」*ἢς μείζον οὐδέν* (XXXVI.134)、*οὐ μῖζον οὐδέν* (XXXVI.161, XXXVI.212) もあり、お決まりの文句であったようだ。人物像：この巻が何よりも見やすさを配慮して構成されていること、また魅力的なイラストが散りばめられ、派手な宣伝文句が多用されていることから、第XXXVI巻の著者は、商品としてのマニュアル本の生産者であり、この巻自体が商品であったか、あるいはその元版であったと考えられる。

おわりに

これまでの考察結果を冒頭に述べた三つのレベルに分けてまとめよう。レベル1：『ギリシア語魔術パピルス』から41人の魔術師の名前が検出された。半ば神的な伝説上の人物から『ギリシア語魔術パピルス』と同時代の人物までいた。前者の人物は、名前の古さや権威を利用して、魔術の開発者に仮託された一種の広告塔とみなすべきであろう。彼らを地域別に見ると、一番多いのがギリシア人であるのは、『ギリシア語魔術パピルス』と言う商品がギリシア語で書かれたことから明らかのように、ターゲットがギリシア人であったからであろう。またエジプト人が多いのは、この商品がエジプトで生産され、ギリシア人から見てエジプトは魔術の国であったから当然であろう。次いでユダヤ人が多いのはおそらく、エジプト内のギリシア都市のみならず、ギリシア本土や小アジアのギリシア都市に住むギリシア語を理解するユダヤ人もターゲットだったからではないだろうか。このことはルカ『使徒行伝』（19.11-20）に見えるように、1世紀後半のギリシア都市エフェソスに住むギリシア人とユダヤ人の両方が大量の魔術本を所有していた事実と符合する。次にペルシア人が多いのも、ギリシア人にとってペルシアはマゴイの国であったし、ペルシア戦争との記憶とも結び付いていたからだろう。一方、シリア人は別として、ローマ人が最も少なく、いずれも『ギリシア語魔術パピルス』と同時代人であったのは、ローマが魔術の後進国であり、魔術を権威づけるのに適した古い人物が見当たらなかったからだろう。レベル2：「セトナ・カエンワセト物語」と『ギリシア語魔術パピルス』の記述を比較すると、共通点の多いことが分かった。それらが描くように本来、魔術本の原典は、ステレーや書物の形で神殿や廟の内奥に安置されており、それらにアクセスできる神官たちがコピーして、エジプト語からギリシア語に翻訳し、自らの魔術本に編集していったのだろう。また魔術師たちは横のつながりもあって常に情報交換し、多数の魔術本を読んで抜き書きし、さまざまな情報をブレンドしながら、魔術文書を何世紀、何十世紀にもわたって書き継いでいったようである。レベル3：『ギリシア語魔術パピルス』の各巻の文書の体裁や内容の傾向から、各巻の著者の人物像を探った結果、実直な研究者（第V巻、第VII巻、第XIII巻）、やや商業主義的な研究者（第IV巻）、商業主義者（第XXXVI巻）など、様々な人物像が浮かび上がってきた。

さて、41人の魔術師たちの中で『ギリシア語魔術パピルス』と同時代に活動したと思われる魔術師は7人いる（12）、（26）、（27）？、（33）、（39）、（40）、（41）？。彼らは実在した魔術師だったのだろう。地域別に見ると、ローマ人3、ギリシア人2、ユダヤ人1、エジプト人1で、古い人物のリストと逆の結果になる。彼らは、アスクレピオス神官、悪霊払い、医者（？）、医術書の著者など、癒しという点で緩やかに共通しているように見える。古代における医者も、神殿を出た遍歴する神官や旅する大道芸人

のような魔術師と同様、遍歴する人々であった。また患者と密室で接する機会も多かったし、魔術本には医学的な内容も含まれていた。そこで研究史の末尾で提起した魔術本の「販売者」と「販売経路」の問題について、今後は「遍歴する医者」の観点から考えてみたい。

註

- (1) 前野弘志 「『ギリシア語魔術パピルス』を読む」『西洋史学報』42 [2015] 1-29頁。
- (2) A. Rusch, *Nephotes*, *RE* 16-2, [1935], K.2493-2494, *Dielemeden* [2005], p.266, n.211, p.258, n.176。
- (3) W. Helck, *Psammetichos*, *RE* 23-2, [1959], K.1305-1308, *Dielemeden* [2005], p.269。
- (4) 山花京子 『古代エジプトの歴史—新王国時代からプトレマイオス朝時代まで—』慶應義塾大学出版会 [2010] 225頁。
- (5) K. Preisendanz, *Pitys* (3), *RE* 20-2, [1950], K.1882-1883。
- (6) *Dielemeden* [2005], p.266-267, n.212。
- (7) *DKP*, Bd.5, *Xerxes.I*, [1979], K.1431。
- (8) *Dielemeden* [2005], p.264, n.197。
- (9) K. Preisendanz, *Ostanes* (8), *RE* 18-2, [1942], K.1610-1642, *Dieleman* [2005], p.264, n.197。
- (10) K. Preisendanz, *Pibechis*, *RE* 20-1 [1941], K.1310-1312。
- (11) *Dieleman* [2005], p.267, n.213。
- (12) E. Riess, *Apollobex*, *RE* 1-2, [1894], K.2847, K. Preisendanz, *Nachträge (Pibechis)*, *RE* 20-1, [1941], K.1311-1312。
- (13) *Dieleman* [2005], p.263, n.195。
- (14) *Dieleman* [2005], p.266, n.209, p.257, n.171。
- (15) K. Preisendanz, *Pnuthis*, *RE* 21-1, [1951], K.1104。
- (16) W. Quandt, *Keryx*, *RE* 11-1, [1921], K.348-349。
- (17) *Dieleman* [2005], p.269, n.226。
- (18) *Dieleman* [2005], p.267, n.214。
- (19) Kind, *Manethon* (1), *RE* 14-1, [1965], K.1060-1102, *Dieleman* [2005], p.266, n.210。
- (20) W. Kroll, *Manethon* (2), *RE* 14-1, [1965], K.1102-1106。
- (21) *Dieleman* [2005], p.264, n.198。
- (22) *Dieleman* [2005], p.175, n.81。
- (23) *Dieleman* [2005], p.264, n.196。
- (24) K. Preisendanz, *Pachrates*, *RE* 18-2, [1942], K.2071-2074、特に K.2072。
- (25) *OCD*³, *Dardanus*, p.430。
- (26) *Dieleman* [2005], p.267, n.215。

- (27) *OCD*³, Orpheus, p.1078。
- (28) ホメーロス『イーリアス（中）』呉茂一訳、岩波文庫 [1956] 150頁、一部省略。
- (29) 上掲『イーリアス（中）』148頁、ママ。
- (30) 上掲『イーリアス（中）』151頁。
- (31) 上掲『イーリアス（中）』65頁。
- (32) Liddell & Scott⁹, κεστός, p.944。
- (33) *OCD*³, Pisistratus, p.1186。
- (34) Lesley Adkins & Roy A. Adkins, *Handbook to Life in Ancient Rome*, Facts On File [1994], Books, p.246。
- (35) *OCD*³, Homer, p.718。
- (36) *OCD*³, Pythagoras (1), Pythagoreanism, p.1283。
- (37) jocular recipes (*Liddell & Scott*⁹, παίγνιον, p.1286) 「おどけたレシピ」。
- (38) 同様のトリックは、no.176, XIb.1-5にも見られる。
- (39) E. Wellmann, Demokritos 6), *RE* 5-1, [1903], K.135-140, I. Hammer-Jensen, *RE.S* 4, [1924], K.219-223, H. Steckel, *RE.S* 12, [1970], K.191-223, 特に K.193-194, K.199-200, *OCD*³, Democritos, p.454, Dieleman [2005], p.264, n.199。
- (40) Dieleman [2005], p.263, n.194。
- (41) Kern, Erotlyos, *RE.S* 4, [1924], K.386。
- (42) *historiola* とは、魔術師が外国の神話から取材したエピソードを自分の呪文に編み込んだものを指す (Breashear [1995], p.3438)。
- (43) Dieleman [2005], p.267, n.218。
- (44) *OCD*³, Apollonius (12), of Tyana, p.128。
- (45) H. Goossen, Himerios, 2), *RE* 8-2, [1913], K.1635。Dieleman [2005], p.263, n.193は根拠がないとする。
- (46) LXXXIII と CV にもこれら三名が見られるが、*PGM* に掲載されていないので行数は不明。
- (47) S. ヘルマン / W. クライバー『よくわかるイスラエル史—アブラハムからバル・コクバまで—』樋口進訳、教文館 [2003 / 原書1996] 17頁、20頁。
- (48) *REAMR* = Eric Orlin / Lisbeth S. Fried / Jennifer Wright Knust / Michael L. Satlow / Michael E. Pregill (eds.), *The Routledge Encyclopedia of Ancient Mediterranean Religions*, Routledge, New York / London, [2016]。
- (49) Dieleman [2005], p.268, n.220。
- (50) 上掲『よくわかるイスラエル史』23頁。
- (51) 上掲『よくわかるイスラエル史』25頁。
- (52) K Preisendanz, Salomo 4), *RE.S* 8, [1965], K.660-704, Dieleman [2005], p.268, n.219。
- (53) no.470 「ソロモンの目」(XCII)、no.473呪文中に置かれたもの (XCIV)。いずれも

- PGMに掲載されていないので、行数は不明。
- (54) Dieleman [2005], p.219。
- (55) PGM, Bd.II, S.114 (テキスト)、S.115 (ドイツ語訳には、コプト語部分の訳はない)。
- (56) Dieleman [2005], p.268, n.221。
- (57) OCD³, Zoroaster, p.1639。
- (58) E. Reiss, Astrampsychos, RE 2-2, [1896], K.1796-1797, Dieleman [2005], p.268, n.222。
- (59) F. Lammert, Klaudios Ptolemaios, RE 23-2, [1959], K.1788-1858。
- (60) Dieleman [2005], p.267, n.216。
- (61) GMP, p.339、イアン・ショー／ポール・ニコルソン『大英博物館 古代エジプト百科事典』内田杉彦(訳) 原書房 [1997/原書1995] トト368頁。
- (62) GMP, p.339、上掲『古代エジプト百科事典』トト367-368頁、Rosemary Ellen Guiley, *The Encyclopedia of Magic and Alchemy*, foreword by Donal Michael Kraig, Checkmark Books, New York, [2006], Hermes Trismegistus, p.134。
- (63) 上掲 *The Encyclopedia of Magic and Alchemy*, p.134。
- (64) Donald B. Redford (ed.), *The Oxford Encyclopedia of Ancient Egypt*, Oxford University Press, [2001], vol.3, SETNA KHENWASE CYCLE, p.271。
- (65) 山花京子『古代エジプトの歴史—新王国時代からプトレマイオス朝時代まで—』慶應義塾大学出版会 [2010] 224頁。
- (66) 上掲 SETNA KHENWASE CYCLE, p.271、Hoffman, *Ägypten: Kultur und Lebewelt in griechisch - römischer Zeit, Eine Darstellung nach den demotischen Quellen*, Akademie Verlag, Berlin, [2000], S.207。
- (67) 上掲『古代エジプトの歴史』223頁、ウナス王の治世は不明。
- (68) 上掲 *Ägypten: Kultur und Lebewelt*, S.207-208。
- (69) 中島孤島(編)『エジプトの神話伝説』世界神話伝説体系3名著普及会 [改訂版1979/初版1928] 「セトナ王子物語」222頁。
- (70) 主人公の名前は違うが、これとほとんど同じ筋の「サトニ・ハームス奇談」という物語が、矢島文夫(編)『古代エジプトの物語』教養文庫 [1974] 152-174頁に収められている。これもデーモニックで書かれており、プトレマイオス朝期の前233年頃のものと考えられている(上掲『古代エジプトの物語』172-173頁)。
- (71) ギリシア語の原文は書かれてないので未確認。
- (72) アナスタシ・コレクションは PGM IV, V, Va, XII, XIII, XIV, PDM xii, xi, および二冊の錬金術本の10文書からなる (Franfurter [1998], p.228-229; Dielemann [2005], p.ix; DNP, 12/2 [2002], Zauberpapyri, K.697)。
- (73) 厳密に言えば、第I巻の著者と第III巻の著者もギリシア語とコプト語のバイリンガルである。

(広島大学大学院文学研究科)